

ひとりひとりの労働者にとつて、どうにもかち取れない労働条件や待遇をば、団結と団体行動をもつて高く基準化していこうとすることは、組合運動の一つの大きな目的である。そして労働協約がそのような闘いの結果生れるのであるならば、およそ協約は十分に組合員たる労働者の要求を表現したものであるはずだし、また労働者の強い関心によつて支えられるものであるべきはずである。しかるに事實は必ずしもそうではない。賃金斗争なら斗えるが協約斗争では斗えないというのがわれわれのしばしば耳にするとところである。ではどうしたら労働者の要求を協約に具体化することができるか。どうしたら協約に対する組合員の関心を高めることができるか。これは組合運動者の等しく聴きたいところであるに違いない。本書はまさにこの要望に応えつつ何故に北鉄労組が今日比較的利益な協約をもつのかの秘密を示してくれるものである。それはいわば著者が組合員とともに身をもつて書いた協約斗争の歴史であるからだ。

しかし、どう協約を闘うかということは、組合運動者だけの聴きたいところであるのではない。協約が一つの規範であるかぎり、規範とその遵守状況との一致が如何に担保されるかということは、わ

序

文

内山光雄 著

幹部斗争から大衆斗争へ

北陸鉄道労組の
経験を中心として

れわれ労働法学を学ぶ者にとつての興味ある課題だといふことができる。また単に興味ある課題であるというだけに止まらない。労働者の利益がどう守られるかといふことは、支配者の為めだけに法律を学ぶ者でないかぎり、その関心事であるにちがいない。本書はまた、この意味において十分に読者に応えてくれるものをもつてゐる。

組合員大衆が自分たちのために真の利益を追求して闘ふことは、当然にその利益を妨げる障碍の本質をも捉えさせる。合理化攻勢による賃銀低下や労働の強化が、占領から講和へと続いておかれてゐる日本の地位に不可分につながること知らされる。内灘にとどろく砲声が、自分たちをも含んで日本の労働者階級に齎すところのものを知るかぎり軍需輸送拒否の斗いは自然の方向であつた。本書は協約斗争から内灘斗争へ、幹部斗争から組合員全員の斗いへと展開する階級的自覚の過程を指導と生長との関連のうち語つてくれる。わたくしたちはそこで生き生きとした事実をもつて組合運動と組合の政治的活動との相互関係を教えられる。わたくしは躊躇なく、本書を組合運動者といわず労働問題や労働法の研究者といわずすゝめたく思うのである。

一九五四年メーデーの日に

野村平爾

序 文

さきに、「労働協約の基礎知識」を公けにした内山君は、このたび自ら北陸鉄道労働組合の委員長として実践した協約闘争、選挙闘争、内灘闘争の体験と教訓を、豊富な資料にもとづいて一書にまとめて、世に問われた。

この書で強調されている「幹部闘争から大衆闘争え」という命題は、日本の労働組合運動が労働者階級だけではなく、その家族と一体となり、MSA再軍備政策によつてくるしめられている国民各階層との共闘をつよめることなしには、自らの要求をも闘いとりえない今日のきびしい情勢のもとで、まことに適切であり、われわれの共通の課題であると信ずる。

同君は苦勞力行の士であり、戦時中に若い航空兵として従軍、戦争の犠牲と悲惨を身をもつて体験したが、戦後労働運動に身を投じてからは、北陸鉄道労働組合の委員長、私鉄総連の書記長、副委員長として、私鉄労働者の戦線の統一と労働階級解放のために力をつくし、こんにち、平和の戦士としても、平和運動に献身してゐる。

昨年、衆議院選挙には、石川県から統一候補として立候補、惜しくも敗れたけれども、その情熱と闘志を一層燃えたたせて、内灘接収反対闘争の先頭にたつて、北鉄労働者とともに勇敢に闘った。

また、本書であきらかにされている北陸鉄道労組の五人一組の職場闘争委員会の組織は、こんにち、北陸鉄道労組を支える力の源となっており、その経験は、炭坑、国鉄をはじめ他産業労働組合でもとりいれられ、さらに、創意ある自主的な闘争組織として発展させられているところである。

同君は、多忙な日常の活動のなかにあつて、よく研鑽を怠らず、昨年中国帰国者送還の乗船代表として新中国に渡つてからは、和光塾をひらいて、若い組合員諸君の学習運動にも並々ならぬ熱情をかたむけている。

本書も、同君の貴い実践とたゆまない学習、研鑽の結合した賜であり、その努力に、心から敬意を表して、あえてひろく推せんするものである。

一九五四年五月

日本労働組合総評議会

議長 藤田 藤太郎

序 文

地球は丸いものだということは、小学生だつて知っている。どういふわけかは知らなくても丸いということは知っている。おなじように、労資の關係は、搾取被搾取の關係にあることは、労働するほどのものにとつては皮膚にふれる実感である。そこに、あらためて理窟を求めなくてもよいはずである。

ところが、ドル不足とか、国民経済だとか、赤字経済だとか、平等の犠牲だとか、賃金ストップだとかいわれると、何となく、頭がモヤモヤしてくる。社会化をめざす経営参加などといわれると、何かしらよい回答がえられそうにも思われる。また、中山中労委会長や稲葉秀三氏らの労資休戦とか、調停の權威化を手にとつてみると、地球は丸いにしても、銀座通りの柳は平地に芽をふいているではないか、富士やまは遙かにあおぎみるほどの高さではないか、と教えこもうとしているようにきこえる。

どんな難しい情勢のもとでも、敵の側から投げかけられるウソの理論と対決して、まっすぐな労働

者の考え方と実践とを保証するには、何よりも、マルクス経済学に明かにされた「賃労働」をくりかえしくりかえし、学ばなくてはならない。第二には、いのちをかけてたたかつた同志の大衆斗争の経験と自己批判とを、ねぼり、はぼり、討議にのぼせ、具体的な政治としての労資のたたかいについて十分学ばねばならない。

MSAの攻撃が十重二十重に職場の中にまでおよび、政治的重圧は日とともに激しくなり、従来の幹部請負斗争では、破綻してしまふ危険がある。

このとき、北鉄同志がいのちをかけて綴つた記録は、内離の大衆斗争の経験をつうじて広大な、国民抵抗のありかたをつきとめようとしたものである。それは、まさに、貴重な労作である。あえて若き青年同志の労作を推薦するゆえんである。

一九五四年五月

日本労働組合総評議会

事務局長 高 野

実